

氏名	澤田 万里子
ヨミガナ	サワダ マリコ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第605号
学位授与年月日	平成31年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 暮らしの出会いを铸る—蠟原型の変形を取り入れた表現研究— 〈作品〉 なんでもない花を束ねるように 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	赤沼 潔
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	片山 まび
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	谷岡 靖則
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	丸山 智巳
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	岩田 広己
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	
（副査）			（ ）	

（論文内容の要旨）

人は現実と意識、日常と非日常の行き交いのなかに生きている。事物もまた日常と非日常をまたいで存在している。行き交う混乱が日常と化している今、非日常とはより激しく華美でなければならないのだろうか。忘れがちな事物の成り立ちや背景は、普段の生活からすれば非日常的である。日常の中には何気ない非日常への扉がたくさんあり、それに気がつくかどうかの問題なのである。金属の鑄造に至るまでにも、予測しなかった現象や、思いがけない素材の性格に直面することがある。非日常的とも言える鑄金という技法は、単に原型を金属に置き換える技術としてではなく、人類が生み出した技法の一つとしてその創造の世界観を注視するべきである。それが人の思想や事物を捉える感覚に与える影響は普遍的で深いものだろう。私は鑄金によって自身の実感を鑄物という金属に留め、一見矛盾する非日常性と親和性のうちに共感と連鎖を図ろうとする。本論文は繰り返し訪れる非日常との出会いを受け入れ、その応えとして鑄金という世界観の中で自身がたどり着いた表現研究とその可能性と、博士審査展提出作品について論じるものである。

論文は3章からなり、第1章「暮らしの中の非日常」では、自身の創作の原点となる非日常との出会いから、自身の現在の創作姿勢を明らかにした。第1節では日常において、夢や想像といった個人的な経験を含めた非日常の定義を明らかにした。鑄金の制作においても重要な要素である「偶然性」を含め、非日常に出会った時に人の意識や感覚は現在という時間から逸脱する。その経験はセレンディピティに代表されるように各自の創造性を活かすきっかけとなり、「何気ない」非日常にも反応できるための「心がまえ」が重要になる。非日常は感覚（クオリア）・心と別物にして一体であり、非日常との出会いから創造されるものとは共感を伴った人自身であるということもできる。第2節ではその根幹となる思想を工芸という分野において展開した。工芸は暮らしや生活から発展した芸術であり、その個人的な時間単位や感覚にも人は非日常を期待している。茶室における茶道具の「意味の余白」という性質は、非日常性と親和性を両立し、他者との共感を試みる理想の存在感である。また、鑄物という金属がその存在感を実現するにふさわしい素材であることにも言及した。

第2章「鑄金という世界観の中で」では、自身の感覚と一体化する鑄金の世界観について、制作工程を辿

りながら論じた。第1節では自身の修了作品制作を契機に、蠟原型の変形というより能動的に予測不可能性や偶然性を取り入れた表現方法に至った経緯を述べ、さらに蠟型鑄造の特質について再考した。蠟は鑄物の「柔らかみ」を実現し、普遍的な存在感を現すことができる。蠟原型の変形は、その普遍性を保ちつつ瞬間瞬間に受けている影響を留めるように自身がたどり着いた表現なのである。第2節では鑄金の工程に内包する異なる時間感覚を述べた。鑄型制作に見出される東洋の思想や感覚は、特に蠟真土鑄造法において最大限にその世界観を実感しうるものである。第3節では古代から変わらない原理で行われる「吹き」と呼ばれる鑄込みの作業について、共感という観点から考察した。窯焚きから鑄込みは大量の熱エネルギーを伴うまさに非日常的な空間である。その一瞬の気も抜けない緊張感と不可視性や不確実性が神秘性、神聖性を高めている。こうした「見えない」「語らない」ことは、想像力や他者とのコミュニケーションのための共感も引き起こす性質なのである。第4節では仕上げと着色について述べた。仕上げと着色は金属表面の質感と色が与える印象や感覚的な影響を直接的に探求する工程である。この最終的な段階にまでも偶然という非日常との出会いは続き、鑄物の「柔らかみ」を引き出すための駆け引きの時間でもある。

第3章では、博士審査展提出作品『なんでもない花を束ねるように』について、第1節では提出作品の背景と概要、特徴である無垢であることとドローイングとの組み合わせについて述べた。無常観から気がついた身近な植物の「あたりまえ」という特別さは、自身と事物の独自の「距離」を形にしようとするきっかけとなった。また、一番身近な植物をモチーフにすることは初めて気持ちを形にした花束という原点への回帰にもなったが、植物の不完全性と欠陥とも言える鑄造の偶然性に富んだ表情の一体化、さらにそれをドローイングと重ねることは、鑄物の輪郭を外に開いていき、「意味の余白」を実現する新しい試みである。第2節では試作品からの技法研究と具体的な制作工程を詳述し、博士審査展における展示成果を述べた。経験と実感によって考え、作業ではなく「制作」していく。常にリアルタイムな感覚を活かして、それを留めることで、また新たな関係性が模索されるのである。

（論文審査結果の要旨）

澤田万里子氏は、日常における「非日常」との出会い、つまりは日々の暮らしの中で感じる想いを丹念に確かめながら、密やかな物語のような作品世界を作り上げていく作家である。提出された論文では、筆者の創作の根源である日常における「非日常」との出会いについて、蠟真土鑄造法によって鑄金に置き換えていく過程をつぶさに述べている。鑑賞者が作家に対してその発想の源や思考過程、あるいは複雑な制作過程を問うことは常であるが、作家自身がそのひとつひとつの過程について丹念に言語化することに成功していると言え、同氏の論文は作品と見事な対をなすものと言えよう。

本論文の構成は3章からなる。第1章では、創作の源である非日常の定義、出会い、心理的な動きについて論じられる。あわせて意味の余白をたたえ、人に寄り添う工芸としての鑄金について言及される。第2章では、蠟の変形にはじまる蠟真土鑄造法のプロセスを丹念に追いつつ、その過程ごとの心の動きや想いを救い上げる。第3章では、作品のモチーフとなっている同氏の庭の風景、さもない日常からふと「非日常」の世界へと入り込む作品世界と制作プロセスが論じられる。特に2章、3章の制作プロセスのなかで生じる心の動きに関する文章は、作家のみが語り得る言葉ともなっており、魅力的なものとなっている。論文を通読して感じることは、手で考え、感じた痕が温かなアウラを放つ作品と同様に、いつしか同氏の記憶、心の動きに刻まれていった魅力的な日々の物語に誘われることである。

とりわけ工芸作家のなかで、同氏のように日常を重要視、あるいは繊細にとらえて作品世界を作り上げる作家は少なくない。しかし、それがあまりにも自らに近い感覚であるために、とすると単に感想を書き連ねて終わる危険性も秘めていると言えよう。しかし同氏は読書経験がきわめて豊かであり、また理系の研究者の祖父の影響によるものか、客観的な記述を目指した点も高く評価できる。いっぽうで、その執筆態度が同氏の言葉というよりも、やや借り物の言葉になっている部分も残されてしまったかに思われる。しかし今後、新たに制作を試みるなかで、自身の言葉とならなかった部分についても十分に文章表現をしていくことが可能であると予測される。

以上のように論文が作品の背景を十分に説明するものであり、記述や構成の完成度も高いことから、審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(作品審査結果の要旨)

澤田万里子の作品「なんでもない花を束ねるように」は、「何気ない」非日常との出会いから生まれる「クオリア」にある共感性と非日常についての密接に関連する偶然性を手がかりにその時間性を考察した中で制作している。「セレンディブティー」にある偶然性は鑄金の制作プロセスに於いて非常に多く発見出来る可能性を持っており、美術の制作上で至極当然のこととして成し得る行為でもある。しかし、それを具体的に且つ自然な行為として作品に表現することは難しい。同氏の作品では哲学的な意味合いで作品の過程を語り、感覚としての「クオリア」によってより思考を掘り下げたものとなっている。多くの哲学者の思考を引用しながらも彼女自らの言葉で綴った論文では同氏の思考と隔たりが少なく、そのことによって作品との整合性が取れている点は高く評価される。

同氏の作品は制作プロセスの中で偶然性を大切にしている。それを活用することで自身の作品を表現してきた。修士の頃の作品にはそこに頼っているところが見受けられるが、論文に記されている二つのキーワード「クオリア」と「セレンディブティー」により、自身の作品に対する姿勢が明瞭になっており、作品が向上している。今回の作品の制作法は日本の伝統的な真土による蠟型鑄造法で制作している。蠟型鑄造法の中に「真土によるもの」と「石膏によるもの」との比較から自身の感覚と二つのキーワードが絡み合わせた中で独特なかたちを創り出している。このことは、ただ単に素材を置換する意味合いでの鑄造とは明らかに違っている。同氏の制作プロセスとして、蠟原型制作時の気温や重力による歪みを感じながらの造形と湯道方案、鑄型制作時の土の重さと蠟の脆さとの計算による込める為の計画性、或いは埴汁粘土の収縮による鑄型のかたちの変化を取り入れ、鑄型焼成時の型の歪みをも考察し、自然の中の要素と共に偶然性をふんだんに含め加えてきた。つまり、鑄造プロセスが制作の一部である。そして、同氏の言う「セレンディブティー」の中で鑄上がった作品に仕上げを施し西洋的着色法を使いつつ、ドローイングと併せることで新たな表現を模索している。展示作品では作品に持つ裏側の情景も意識させる作品となっている。こういった中、同氏の作品には若干言葉と造形を綺麗に重ね過ぎている部分が見受けられるにしても、コンセプトが明瞭になり、それが作品に反映されて鑄造プロセスと共に表現されて来ていることは素晴らしく、作品として十分に評価できる。

審査員の同意のもと博士学位に相当するものとして意見の一致をみた。

(総合審査結果の要旨)

申請者は、審査論文「暮らしの出会いを鑄る -蠟原型の変形を取り入れた表現研究-」の中で、日常と非日常を取り上げ、それぞれ論じている。ここでの「非日常」とは普段の生活から離れた時間や空間であり、申請者が制作の手段として身を置いている工芸・鑄金の世界に非日常的なものを感じ取り、その背景としての想像の世界観を見つめ、非日常性と親和性との関連について作品を通して突き詰めていっている。そこでたどり着いた蠟を原型とする真土型鑄造を通してその蠟の変形から得られる非日常的偶発性のある造形が制作の原動力となっている。

その時間的流れによる静寂と動勢からの文章展開は、鑄造を実際に経験している者の心の奥に響くものであった。全体的に繊細な感情が散りばめられ、独自の工芸・鑄金の領域に踏み込んでいる内容は評価できる。

本審査作品「なんでもない花を束ねるように」は、蠟真土鑄造法によるブロンズの鑄物で制作した生活の中で出会う花々を中心にして空間を設定し、自然な状況に包まれたような形状を大切にしたいインスタレーション作品である。花々は随所に大小様々な表情を持って配置され、床面にはドローイングも立て掛けられている。また、花々を配置したボックスの背面にそっと一輪の花が配置され、異種空間の獲得に成功している。蠟真土鑄造法による、鑄型と語りかけながら時間を確認しての制作の仕方は作品にもゆったりとした造

形をもたらしている。温かい印象の裏にある自然との繋がりや、穏やかな表情の植物の内部に隠された生気を読みとると、全体的に拮据をみせ始め、独自の時間の流れを感じさせられる作品であり、評価された。

総合的には、論文の立ち上げも早めに展開しており、時間をかけてじっくりと仕上がってくる内容は魅力的なものであった。伝統的鑄金技法を用いながらも、現代の感覚を溢れるように表現する内容を高く評価し、また、全審査員から博士学位を認める条件を満たしていると判断された。